

### 茶が持つ「結縁性」と戦国武将たち：茶の湯成立の一背景

石田, 雅彦 / ISHIDA, Masahiko

---

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

42

(開始ページ / Start Page)

40

(終了ページ / End Page)

59

(発行年 / Year)

1990-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011051>

# 茶が持つ「結縁性」と戦国武将たち

—茶の湯成立の一背景—

石田 雅彦

はじめに

日本歴史の上で戦国期から江戸時代初期にかけて、茶の湯という文化が政治経済のうえで重要な役割を果たした時期があった。織田信長をはじめとして、多くの武将たちや豊臣秀吉・千利休がその中心であったのは周知のとおりであり、多くの先学がそれぞれについては研究し発表されている。しかし、かくも多くの論考がありながら「何故、戦国大名たちが茶の湯に腐心しなければならなかったのか」の根本理由については、いまだ十分な説明がなされていない。

茶の湯文化史上では、武将たちが茶の湯に懸命になった理由として、「権威の象徴・名物の収集・戦場における慰

み・茶の湯数寄<sup>(1)</sup>」が通説とされている。本稿も茶の湯が持つ趣味的性格からみて、これらの理由が大きな背景になっていることはいわずける。しかし、そうはいえるものの何故茶の湯が権威の象徴になりえるのか。また、これほど深く政治や経済にまでかわっていた茶の湯が、寛永期に入り政治上急速に形骸化していったのは何故なのかを考え合わせる時、もっと別な根拠があったと思われる。そこで本稿ではこうした観点をもとにして、まず茶の湯が持つ「根本的性格」をさぐりたい。その上でこの根本的性格が、戦国末期から江戸時代初期にかけての武将や大名たちに、どのように取り入れられ利用されていたかを振り返り、さらには戦国期の武将にとって茶の湯とは何であったか、を探ってみることにしたい。

## 一 茶が持つ縁の媒介性

日曜日、J R「原宿」駅近くを歩いていた時のことである。前の方から竹の子族といわれる頭を黄色に染めた少年たちが歩いてきた。日曜だから何の不思議も感じずすれ違った。ところがである、通りすぎたあと後ろの方で「彼女ーっお茶飲まないっ」と声がした。私は思わず振り返った。それは、彼等が通りすがりの見知らぬ少女たちに声を掛けたことに、驚いたからではない。「竹の子族」は曲がりなりに現代日本風俗の最先端をいく少年たちである。その少年をして少女を誘うのに、何故、古典的な「茶を飲まない」というさそい言葉を使うのか、という点にある。他にもっと彼等に相応しい「誘い言葉」があっても良いはずである。察するに彼等にとっては、少女に声を掛ける時には、何の言葉でもいいのであって、てっとりばやく人を誘う時に誰でもが気軽に使う、「お茶を飲もう」と言っただけにちがいない。しかし、少年が少女を誘う名目の茶（実際に飲むのはコーヒーでも）には、かなり深い意味が込められている。それは、少女が誘いにのって彼がご馳走してくれた茶を飲むということは、彼を認識するということになるからである。すなわち、この場合の茶は両者を結

茶が持つ「結縁性」と戦国武将たち（石田）

びつけるきっかけを作っている。<sup>(2)</sup>

我々が意識せずに「茶でものみながら」と声を掛けるとき、そこには実際の深淺にかかわらず、なんらかの結縁の発生がみられるのではないか。これが、本節のテーマである。勿論、相手と縁を結ぶには、様々な方法があるが、本稿は茶に絞ってこれを考えてみたい。では、実際に茶が縁を媒介し得るかを、時代を遡りながら追ってみよう。

## (1) 草加における見合いの場合

これからあげる事例は、最近まで、関東一円でお見合いの席に於いて一般的に行なわれていた習慣である。ここでは「草加市」の例をあげてみたい。

見合いをしてもよいとなったら、日柄を選んで娘の家で行なう。大安や友引が好まれ、仏滅や三隣亡の日は避けた。草加二丁目では、酉の日は吉日だが、寅の日はよくないと言っている。大抵昼食時にかけて行なうが、昼間では人に見られて恥ずかしいからと、夕食時にかけて行なうこともあった。(略) 婿の一行は、菓子折を手土産として娘の家に行く。(略)

娘の家では奥座敷に通される。ここで娘の父親と話をしていると、娘が白湯を運んでくる。青柳町では、最初からお茶を出す。「オチャになっちゃう(縁談が

こわれてしまう」と言つて、必ず最初は白湯を出すことになつていた。白湯は、娘のことが気に入らなくても飲んでよかつた。この後、再び娘がお茶を運んでくる。見合いの席で出されたお茶は、市内全域で諸否のサインとなつており、娘のことが気に入らなければ飲んではいけないことになつてゐる。気に入らないときには、「家でよく相談してまた来ます」と言つて帰り、後で仲人に結婚の意志のないことを伝えた。また、娘のことが気に入つた場合にはお茶を飲むことになつてゐる。娘がお茶を飲んだことを見届けると、仲人が結婚の意志を尋ねるので「よろしくお願ひします」と答える。同時に、もう一人の仲人が娘を別室に呼び、娘と両親の気持ちを尋ねる。(略)「よろしくお願ひします」ということで話が決まり、お膳が出される。(略)<sup>(4)</sup>

— (傍線筆者以下同じ) —

このように関東一円では、茶が結婚の諾否の合図に使われている。娘が出した茶を飲むか飲まないかによつて、その結婚が決まるのである。この草加のお見合いの茶には先の少年たちの茶よりも、もつとはっきりした縁の媒介性を認めることが出来る。

## (2) 島津義久「礼茶」の場合

天正三年三月二十七日、琉球から六十年ぶりに紋船(あやふね)が薩摩国に到着した。紋船とは、舳が青雀と黄龍の姿で綾どられていたのでその名があり、琉球王尚氏は、島津家の代がわりごとにこの特別の使船を送つて慶賀の意を表わすことを常としていた。この時の紋船は十六代当主島津義久の襲封を賀し、あわせて前琉球国王尚元の訃報と新国王尚永の即位の報告を、目的とするものであった。したがつて、普通ならば直ちに当主の引見があり、歓迎の宴がはかられてしかるべきものであった。<sup>(5)</sup>しかしながら、この時の薩摩の対応は歓迎ならぬ糾問から始まつたのである。<sup>(6)</sup>そして、この時点から義久との謁見までに何回かの交渉を経なければならなかつた。ただ本稿は薩摩の琉球支配を論ずるのが目的ではない。本稿が注目したいのは、この事件が最終的に「礼茶」でしめくくられている点である。

琉球使節は義久に拜謁した直後に、

— 略 —、使僧・使者兩人者御茶子參候て、礼茶被下候、船頭三拜申候て、やかて退出申候、— 略 —、御礼茶過候へハ、兩使御前を退出候、御亭之上評定所に支度替、琉球支度申候、— 略 —<sup>(7)</sup>

義久は、船頭を下がらせ使僧・使者の二人だけに礼茶を出している。紋船来着から礼茶に至るまでにどの様な経過

があつたかを知ることによつて、礼茶が何を意味するかを、日次で追つてみたい。

三月二十七日 琉球ノ紋船来着ス

二十九日 島津氏奏者上井寛兼・上原長門守ト共ニ

琉球使者ノ宿館ニ使イシ去年ノ条書ヲモ

ツテ詰問セシ条条ノ返答ヲ求ム

四月一日 詰問ニ対シテ使者ノ釈明

島津氏ノ印判不帶船許容ノ件

進物菲薄ノ件

国吉丸脇船頭ヲ処刑ノ件

二日 義久、琉球使者トノ折衝ニツキ津興（広

齋寺）ノ意見ヲキク

三日

義久、琉球ハ島津氏ノ領分ナリト言ウ、

近年ノ疎略放任スベカラズ、輕薄ノ進物

ハ退ケ使者ノミ引見セン、使者進物ヲ備

ヘズシテハ謁見ヲ遂ゲガタシト陳ズ

八日

使者ニ返事ヲ催促ス、使者、雪岑（興國

寺）ト内談ノウエ返答ス、進物輕薄ニヨ

リ雪岑ト議シ金三十兩ヲ増シ進メントス

九日

義久、使者ノ私ニ進物ヲ増サシメント

ヲ止メシム

十日 義久 使者ニ謁見シ、引見後礼茶ヲ与ウ

では、「使者」に供せられた礼茶<sup>(8)</sup>とは、何を意味したも

のなのであろうか。考えるに、第一に領国外からの使者で

あること。第二に使者・使僧だけに茶が出されているこ

と。第三に義久謁見まで双方に長い交渉があつたこと。第

四にこの後島津氏が支配力を持つようになったこと。従つ

て、礼茶後に改めて饗宴が催される式次第から、この場合

の茶は「極めて政治性の強い儀礼的な茶」であつたとい

うことができよう。この礼茶は薩摩が琉球支配へ乗り出す

「縁の強制」の象徴であらう。<sup>(11)</sup>

(3) 入宋僧「成尋」の茶

平安時代最末期に、京都岩倉の大雲寺別当であつた成尋

(じょうじん) 阿闍梨が、弟子僧七人(聖秀・長明・頼縁

・快宗・惟観・心賢・善久) を連れて、延久四年四月十三

日に入宋し、翌延久五年六月十二日に五人の弟子達(頼縁

から善久まで) に経卷等を持たせて帰国させるまでの、一

年有余を克明に記録した『參天台五台山記』<sup>(12)</sup> という日記が

ある。この日記中に、頻繁に茶の記事がでてゐるが、その

中でも最も多く見られるのが「点(點)茶」の記述である。

住持老僧点茶、(延久四年五月十九日)

於國清庁院点茶、(同月二十二日)

大守点茶葉、(同日)

謁子鴻長老有点茶、(同月二十九日)

次入如日文章房点茶、(同日)

切々相留点茶菓子薬酒、(同日)

数日から引用するだけで、これだけある。果たしてこれはなにを示すのだろう。

平安時代末期日本国内においては、茶を飲む習慣は殆ど知られて無い状態であった。茶という物を知り、そして喫茶に対する認識が高まってくるのは、やっと鎌倉時代中期になってからのことである。<sup>(13)</sup>したがって、成尋たちは日本国内で茶に親しむというようには無かった筈である。ところが、入宋して以来新しく人に面会する度に、必ずその場で彼等に茶が点茶せられる。この異国の習慣は、成尋にとっては驚きであり、また嬉しいことであったと思われる。

延久四年四月二十六日、杭州寧波の都督に赴いたときのことである。

二十六日乙亥、辰時詠共参府献参天台山由申文、於廊可点茶由有命、即向廊喫茶、次従都督内以新去茶院、

銀花盤送香湯飲了、見物之人濟々也、退出了、

成尋たちが都督へ、旅行の目的地天台山への旅行許可を

申請に行ったとき、回廊で点茶がなされた。現在でもセールスマンたちがいうように、営業に行ってお茶ができれば、その商売は成功の方へ一歩前進したも同じ。<sup>(14)</sup>申請した成尋たちの天台山行もほどなく許可され、五月四日一行は無事に船出をすることになる。都督回廊で出された茶は「一杯の茶」であっても、成尋にとっては得難い茶であったにちがいない。従ってこれ以降、日記には至る所で茶の記事が記されている。成尋にとっては宋での旅行中、誰に会ったのかという記録は、立場上非常に重要な事柄であり、しかもその相手から点茶されたことは、会合が成功したか否かの証査になったのであろう。

また、仏縁にも注目したい。成尋が訪れた天台山には古今入宋巡礼の僧侶たちが必ず参拝する「石橋」<sup>(15)</sup>がかかっている。橋の向こうには羅漢堂が建てられており、この一帯がいわゆる五百羅漢の仙境とされた。成尋が入宋途中、東支那海で大風に見舞われた後、今度は反対に良風が吹かず、船人たちが騒動を起こしたとき、祈ったのが「予、心中不動念、五臺山文殊、並一萬菩薩、天台石橋、五百羅漢、念誦數萬遍」<sup>(16)</sup>であった。

辰貶参石橋、以茶供養羅漢五百十六杯、以鈴杵真言供養、知事僧驚來告余、八葉蓮華文五百余杯有花文、知

事僧合掌禮拜、小僧寔知羅漢出現受、現受大師茶供、  
 現靈瑞也者、即自見如知事告、隨喜之淚與合掌俱下、  
 このように茶を供えてから、羅漢現瑞を見るのがひとつ  
 のパターン<sup>(18)</sup>であるが、この例でも、成尋が茶を供えたこと  
 に対して、羅漢が現瑞で答えるという縁の発生がうかがえ  
 る。だからこそ成尋は涙したのであろう。<sup>(19)</sup>

本節では、時代を遡りながら、三つの事例をあげてき  
 た。それぞれが特殊な例のように見えるが、決してそうで  
 はない。我々の周りの生活から考えても、この事例と重な  
 る部分がたくさんあるのである。こうして見るならば、縁  
 の厚薄・大小・遠近にかかわらず、日本人が茶という飲み  
 物に触れた当初から現在に至るまで、茶には根本的に「縁  
 を媒介する」特質を持っている、と言えるのではないだろ  
 うか。そこで本稿は「縁を結ぶ。関係をつける。近づきに  
 なる。」を「結縁<sup>(20)</sup>」と称されることから、これを「茶がも  
 つ結縁性」と定義づけたい。しかしながら、結縁性は茶ば  
 かりではなく、「酒」にもあるのである。

本稿が主題とする、戦国期から江戸時代初期にかけての  
 茶の湯は、筆者が先に記したように、茶の場面と酒の場面  
 の、二幕からなっている。即ち、

茶が持つ「結縁性」と戦国武将たち(石田)

一、五日、一略一、此日申刻計、忠棟より御茶一服被  
 下候する由候<sup>(21)</sup>参候、御茶湯座へ堀池宗叱案内者被  
 申候間、打烈候てはいり候、其衆、上拙者、次宗叱、  
 次東雪、堀池弥次郎也、先々各風呂釜之鉢一覽申  
 候、其後亭主指出被成、食参候而御酒三返也、配膳  
 者、忠棟御子息増喜殿只一人にてめされ候、御湯参  
 候て、菓子参候也、其後各罷立、暫遠見共申候て、  
 手洗水仕候也、其後又座ニ各参候、宗叱御茶立候  
 也、天目臺など秘藏とて被出候間、各別而見申候、褒  
 美共也、其後種々閑談共過候て、うす茶にて候、又  
 宗叱被立候、炭なども宗叱被置候、其後御汁参候て御  
 酒也、一略一、御酒過候へハ、各罷歸候也。<sup>(22)</sup>

此の史料は、天正十一年まだ薩摩国が豊臣秀吉に制圧さ  
 れるまえ、京の茶の湯の宗匠堀池宗叱が、鳥津義久家老伊  
 集院忠棟邸で催した茶の湯の有様である。日記の執筆者で  
 ある上井寛兼は、「御茶一服被下候」と記していながら、  
 実際には茶の湯の座では、

酒三返<sup>(23)</sup>御湯<sup>(24)</sup>菓子<sup>(25)</sup>一時退出<sup>(26)</sup>御茶<sup>(27)</sup>うす茶<sup>(28)</sup>炭置  
 き<sup>(29)</sup>(後段)御酒

という現在行なわれている「茶事」に等しい流れになって  
 いる。以後に出てくる「数寄や茶の湯」が全てこの流れと

同様のものとは言えないが、基本的には茶と簡単な酒肴の取り合わせで行なわれる、と考へても差し支えないと思われ<sup>(23)</sup>。

従つて、本稿における茶の湯は、「茶」ばかりではなく「酒」も含んだものと考へていただきたい。ただ茶の湯の場での酒は振舞い（宴会<sup>(24)</sup>）の酒ではなくて、儀礼的な要素に重きを置いた酒といえよう。

## 二 藩政初期茶の湯の役割

江戸時代における藩政初期、つまり家康から秀忠に至る時期は、いまだ戦国期の文化の遺風が色濃く残されている時期であった。その期においては茶の湯はいかなる働きをしたのだらうか。

### (1) 佐竹義宣の場合

慶長七年五月、山城国伏見に徳川家康に従つて滞在していた、常陸国五十万石佐竹義宣は、突然に出羽国秋田への転封を命ぜられた。これは慶長五年の関ヶ原の戦の前に、上杉景勝討伐を命令されながら、景勝が父の代から親交があった故に、進発を逡巡した為の家康の処置であった。ただちに知らせが常陸国に送られ、三ヶ月で移転が完了したが義宣はついに常陸国を見ることなく、転封地秋田へと下

つて<sup>(25)</sup>。このように、佐竹氏ごとき大名でさえ配転頻繁な慶長・元和期であったが、この時期にあつて茶の湯が、大名達の間でいかなる働きをしたかを追つてみようと思ふ。

元和五年二月二十日、徳川秀忠が上洛するにつき、佐竹義宣に江戸へ上るように沙汰が下された。義宣はその日のうちに、秋田を出発して江戸へ向かい、三月六日には江戸に到着した。それから、一月半江戸に滞在して上洛する為の準備を進めるのであるが、その準備の間を縫つて義宣は、驚くべき勢いで幕府要路、有力家臣の家に「数寄（茶の湯）<sup>(26)</sup>」をもつて赴いているのである<sup>(27)</sup>。非常に興味深いので義宣が赴いた家臣とその役職を上げてみたい。

### 〔役職表〕<sup>(28)</sup>

米津田政—台徳院（秀忠）殿御使番、慶長九年江戸の町

奉行、五千石 （一八一—二一九）

嶋田直時—嶋田利正、江戸の町奉行の兄（五一—一九四）

内藤正重—台徳院殿御使番、慶長十九年御持弓頭、二千

九百石 （一三一—二二三）

今大路親清—台徳院殿につかう、幕府医師、慶長十三年

法印、采地三百石 （二〇—一八九）

森川氏信—台徳院殿に勤仕、与力六騎、歩卒五十人支

配、千石 (二七一八六)

猪子一時―台徳院殿御夜話の衆 (二一五―五三)

山名豊国―台徳院殿御伽衆、六千七百石 (二一七九)

堀田一継―台徳院殿御咄衆、八千八百八十石 (二一―一二)

朝倉宣正―始め台徳院殿につかり、徳川忠長家老、三千石 (二一―一二五)

松平正綱―(大河内) 勘定頭(のちの勘定奉行) 五千石(四―三九四)

丹羽長重―陸奥国棚倉藩主、五万石 (二一―三三〇)

黒田長政―筑前国福岡藩主、五十二万石(七―二〇四)

日向政成―与力十騎、足軽五十人、徳川忠長家老、千石(四―一七九)

中野重吉―家康老臣 (二一―三三九)

久永重勝―台徳院殿につかり、弓頭騎馬同心十人、足軽五十人、五千二百石 (二一―八二)

平野長重―台徳院殿老臣、五百石 (八一―三三)

日野輝資―公家、台徳院殿に昵近、上洛の節従う、采地千三十石 (二一―三三四)

千三十石 (二一―三三四)

神尾守世―台徳院殿夜話衆、三千十石(一六―二一四)

茶が持つ「結縁性」と戦国武将たち(石田)

村瀬重治―台徳院殿御使番、四千石 (二六一―一〇四)

桑山貞晴―台徳院殿付属桑山一直祖父 (二一五―三三〇)

細川忠興―豊前国中津藩主、大坂の夏冬の陣に功勞、三十九万九千石 (二一―三〇五)

以上が訪問先の主たる幕臣・大名・陪臣の役職である。義宣が三月十日から四月九日まで、一か月間に数寄で訪問したのは、二八件にもなる。いかに茶の湯が好きといってもこの数は尋常な数ではない。なにか別な目的があるはずである。右の役職表を見て気づくのは、秀忠に直接つかえた譜代の家臣たちが中心であることだ。石高はせいぜい五十石前後の旗本でも握っている実権は強い。とは言え二十万石の大藩の大名が自ら足を運んで、「茶を飲み」に行くのは何故なのだろうか。

これには、佐竹藩の時代背景が関連していよう。佐竹義宣が秋田に移されてから、元和五年まで既に十八年たっている。秋田も落ち着いたのではないかと思われるが、実際はそれどころでは無かったのである。簡単に秋田移封から元和までを振り返ってみると、次のようになる。

慶長五年九月 関ヶ原の戦

七年五月 佐竹義宣秋田に移封

四七

八年二月 徳川家康征夷大將軍に任じ、幕府を開く

五月 佐竹義宣、神明山に築城を始める

十月 秋田領内総検地

九年八月 築城完成、城下町建設を始める

十年四月 征夷大將軍に徳川秀忠

十二年二月 駿府築城、家康江戸より移る

佐竹義宣、院内銀山より幕府運上を始め  
る

十九年十月 大坂冬の陣、佐竹義宣參陣

二十年四月 大坂夏の陣、豊臣氏滅亡

元和元年七月武家諸法度・禁中並公家諸法度・諸宗総

本山の諸法度を定める

二年四月 徳川家康没 佐竹義宣參府

三年六月 徳川秀忠上洛のため江戸を立つ、佐竹義

宣これに先だち上洛す

五年五月 徳川秀忠上洛のため江戸を立つ、佐竹義

宣これに先だち上洛す

以上、幕府の政治情勢の変化と、佐竹氏の内政の動きを簡単に記してみた。移封後佐竹氏にとっては、秋田の整備が第一であったであろうが、本稿が追う所では無いのでこれは擱くが、慶長期全般にわたって、根強い在地勢力の一

掃と近隣諸国との境界トラブル、銀山の開発運営など、山積する問題の解決に多くの時間とその努力が払われた。<sup>(29)</sup>

しかし、秋田藩にとって何より重要なのは、江戸幕府との良好な関係の維持であろう。ところが慶長から元和期にかけては、その江戸幕府に於いてさえ、大きな時代の変化が起きた時代であった。右を見ても分かるように、慶長期は徳川家康の幕府形成模索の時期であり、大坂冬・夏の陣そして徳川家康が没した後は、徳川秀忠の新しい政治確立の時代であった。

また、この時代は秋田藩に限らず、他の各大名たちが最も恐れたのは幕府による改易であった。慶長期、徳川家康の代には最初に豊臣系の大大名（例えば小早川秀秋―備前国岡山・豊臣秀頼―摂津国大坂）達から改易が始められた。その数二十八家。改易は、徳川一門・譜代大名にまで及び、その数十三家<sup>(30)</sup>に達した。この政策で元和堰武を迎えたが、徳川秀忠の代になっても転封策はつづけられた。「秀忠時代は、その晩年に至ってようやく大名配置に変化が乏しくなったが、元和二年以降譜代・外様大名とも激しい転封をうけ、これによって家康時代の大名配置は全く一変するに至ったのである<sup>(31)</sup>」。このように、慶長・元和という時代は、大名たちにはとって戦々恐々たる時代であった。

以上のような、秋田藩を囲む時代背景を考える時、元和五年に佐竹義宣が江戸滞在中に行なった「数寄」には、はっきりと政治性をうかがうことが出来る。特に秀忠の側近は、家康のそれが新参譜代や豪商・学者などを含んでいたのにくらべ、秀忠幼少のころからの譜代によって構成されている<sup>(32)</sup>。義宣がまっ先に訪問した米津田政（よねきつたまさ）も、家康在世中からの「江戸將軍政治」に属する八名中の一人であった<sup>(33)</sup>。こうした上級家臣と大名のつながり、すなわち大名たちと幕臣の関係を忘れてはならない。

例えば、細川氏の場合、幕府とりわけ土井利勝との間では、元和後期から加々爪忠澄や内藤正重といった幕臣が、取り次ぎとして動くことが多かった。たとえば、参府が免除された時、細川氏は、利勝へはいつも通りの進物ではなく、忠澄や正重に相談して特別な進物をあつらえている。このように細川氏がいかにふるまえばよいか、協より入れ知恵をしてくれたのが、これらの幕臣であった。このような幕臣の存在は、大名にとって大きな意味をもっていたことは明らかである<sup>(34)</sup>。

ここで改めて、義宣が数寄に訪れた先の役職表を見ると、佐竹と幕臣たちの繋がり、はっきりと浮き彫りにされている。特に前半は秀忠につかえた譜代の幕臣に集中

茶が持つ「結縁性」と戦国武将たち（石田）

して、義宣がいかに幕臣に気をつかっているかがうかがえるのである。中でも米津田政・嶋田利正（江戸の町奉行）は佐竹家とは、非常に関連が深く、この後も饗を振舞<sup>(35)</sup>ったり、贈り物には必ず名前があがっているほどである<sup>(36)</sup>。

さて、煩しきをおして、論題とは外れた政治・時代背景を見てきた。それは、ひとえに義宣が、江戸滞在を利用して出来る限り幕臣や、秀忠側近と縁を繋ごうとする理由を知る為であった。そうすることによって、「ならば何故、幕臣を訪ねるのに数寄でなければならないか」という問題が新たに浮きあがってくる。常識で考えると「振舞」が相手をもてなすには一番良い方法だと思われるが、義宣は幕臣の家に自分から数寄に行っているのである。これをどう理解すればいいのだろうか。

この点、一、物理的にみて連日の宴会は身体的にとっても無理である。二、慶長二十年発布の「武家諸法度」にも見られるように「可制群飲佚游事<sup>(37)</sup>」の時代であった。三、従って、先に記したような儀礼的な茶の湯の流れならば、節度のある訪問ができる。そして、これが本項にとって最も重要なことであるが、四、当時において数寄（茶の湯）が、幕府や大名たちの間で「互いの関係確認（御挨拶）」の最良の方法として認知されていた、と考えられるのではな

いだろうか。そうすると、茶がもつ結縁性はここでは政治的に広く認められていることになる。

## (2) 木下延俊の場合

佐竹義宣が元和五年、江戸在府中数寄の為に、幕臣の間を駆け回ったことは前項に書いた。このように義宣が数寄で幕臣を訪問するような例は、元和五年ほど顕著ではないが、元和三年上洛の際も行なわれたであろうし、元和七年の参勤の折にも行なわれている。これが単に義宣だけの特殊な例ではなく、他の大名たちも江戸滞在中には、ほぼ似たような行動をしていたことを、前項を補強するためあげておきたい。そうすることによって、茶の湯が藩政初期に、いかに重要な結縁手段として、広く一般的に認められていたかが、歴史的に位置づけることが出来る、と思うからである。

いまだ豊臣秀頼が在世中、秀吉の正室お称（北政所・高台院）の甥にあたる木下延俊の、慶長十八年の一年間の行状を記した日記『木下延俊慶長十八年日記』<sup>40)</sup>がある。延俊は、高台院の兄木下家定の三男である。当時は、豊後国日出（ひじ）藩三万石を与えられていた。当年延俊は三十七歳、正月を江戸で過ごし、二月四日から帰国の途について、徳川家康のいる駿府を経由して京都に約四カ月滞在。

六月末、豊臣秀頼の大坂城に立ち寄って海路豊後国に向かい、七月五日に日出に到着した。<sup>41)</sup>その正月から二月四日までの、江戸滞在中の様子を見ると次のようである。

## 慶長十八年正月

元日

二日 江戸城へ出仕、

三日 延俊、細川忠利、稲葉典通らを振舞う、

四日 延俊、本田正信へ振舞いに出る、

五日 茶の湯延引、

六日 大久保忠隣邸へすき（朝）、都筑為政へ御茶湯ニ御出、<sup>42)</sup>七日 石川康長へすきニ御座候、<sup>44)</sup>八日 村瀬重治へ御茶湯ニ御座候、昼は古田織部へ御越し候、<sup>45)</sup>九日 岡田利治へ御茶湯ニ御座候、<sup>47)</sup>十日 將軍様 御茶湯ニ御座候、<sup>48)</sup>十一日 上様御手前ニ而御茶、次ニ御すミ二度までことに三かいヲ見物仕候へとの御ことに御座候、<sup>49)</sup>十二日 酒井忠世 邸数寄ニ御越被成候、<sup>50)</sup>

十三日 山岡景長 邸へ茶湯、土井利勝邸へ振舞いに御出、

十四日 山岡景長 邸へ茶湯、土井利勝邸へ振舞いに御出、

十五日 山岡景長 邸へ茶湯、土井利勝邸へ振舞いに御出、

十六日 山岡景長 邸へ茶湯、土井利勝邸へ振舞いに御出、

十七日 山岡景長 邸へ茶湯、土井利勝邸へ振舞いに御出、

十四日 青山成重<sup>(51)</sup> 邸へ茶の湯、  
 十五日 稲葉典通邸で朝の振舞、本田忠朝邸振舞、  
 十六日 花房左衛門<sup>(52)</sup> 尉殿へ御茶湯、  
 十七日 安藤重信<sup>(53)</sup> 邸へ御茶湯ニ御出、  
 十八日 「今日は殿様御情遣とて、何方へも御茶湯ニ無御出之候、」

十九日 小笠原秀昌へ御振舞ニ御出、  
 二十日 今朝は青山石見殿へ御振舞ニ御出、  
 二十三日 土方雄重<sup>(54)</sup> へすぎニ御出、  
 二十五日 青山石見邸へ御振舞  
 二十七日 脇坂安元<sup>(55)</sup> へ数寄ニ御出、  
 二月四日 帰国のため江戸を出発、

慶長十八年は、徳川家康の大御所時代であるから、延俊は正月の最初の数寄に徳川家康の譜代家臣で老職の大久保忠隣邸に赴いている。それから以後は、連日のように幕臣を訪れるのは義宣の場合と同じである。大名たちにとって家康や秀忠の側近たちとの意思疎通をはかることは、保身の意味からも非常に大事なことであったのであろう。この場合にも茶の湯が、両者を仲介するという意味で、政治的に大きな役割を果たしている。

以上二例をもって、全ての大名の数寄を代表すべきもの

とは言えないが、少なくとも、藩政初期に於いて、茶の湯は大名と幕府、または大名間の意思疎通をはかるのに重要な役割を果たしていたと言えるのである。  
 それは逆に、茶に「結縁性」という根本的性格がなければ、このような役目は果たし得なかったことを、はっきりと示唆していると思われるのである。

### 三 茶の湯の結縁性と戦国武将

安土・桃山期に茶の湯が政治・経済に利用されたことは周知のごとくである。従って茶の湯の歴史に関しては他の研究書や史料に譲るが、本稿がキーワードにする茶が持つ結縁性が、戦国の世にどのように関わったのかを探ってみたい。

前節で、慶長・元和期の大名たちが茶の湯に結縁性を認め、幕臣との交流に数寄をもって手段としたと記して来た。藩政初期の大名や幕臣たちの、この茶の湯に対する意識は、徳川の治世に突然に生まれてきたものであろうか。これは当然のことながら否である。徳川家康や秀忠、そして江戸時代まで生き残った多くの大名たちが、戦国・織豊期を通じて自然に体得したものの一つであらう。

(1) 博多豪商神屋宗湛の場合

天正十五年正月、薩摩国島津義久が九州を平定せんが勢いで北部九州を狙っていたおり、博多の豪商神屋宗湛は大坂城に招かれた。正月三日の茶の湯で、初めて豊臣秀吉に拝謁する宗湛は、まず広間に通された。

先広間ニ各同前ニ罷居也、奥ヨリ石田治部少輔トノ御出有テ、宗湛一人ハカリヲ御内ニ被召連、御茶湯ノカサリヲ一返拝見サセラレ候、

その後、堺衆五人と一緒にになり、又御飾りを拝見していると、秀吉が入って来て、

筑紫ノ坊主ハドレゾト 御尋被成候得ハ、是ニテ候ト  
宗及御申候、被 仰出ニハ、ノコリノ者ハノケテ、筑紫ノ坊主一人ニ能ミセヨトノ 御定候条、堺衆ミナ縁ニ出テ、宗湛一人拝見仕、ソノ後又エンニ罷出、シバラク後飾ヲ見申也、

と、初めての拝謁にもかかわらず宗湛は堺衆とは違って特別に厚遇された。その後は大名衆と一緒に「筑紫ノ坊主ニメシラクワセロ」や、

御茶ノ時ニ、 関白様御立ナガラ被成 御定ニハ、多人数ナルホドニ、一服ヲ三人ツ、ノメヤ、サラバクジ取りテ次第ヲ定ヨト被 仰出候へハ、一略一、御茶キコシメサル、時、ソノツクシノ坊主ニ四十石ノ茶ヲ一

服トツクリト飲セヨト被 仰出候ホトニ、宗易手前ニ参、一服被下候也。<sup>(58)</sup>

と特別扱いされたのである。これは秀吉が茶の湯の場を政治的に利用したのだが、このように、秀吉が博多の商人に破格の処遇を与えたのは、島津征討を意識してのことであるが、さらに九州平定後に、朝鮮出兵の計画をもっていたからでもあった。<sup>(59)</sup>この大坂城の場合は、茶の湯の結縁性よりも政治的な配慮の方が強く意識されているが、宗湛が茶を通じて秀吉に本当の縁を感じたのは次のシーンである。

天正十六年十九日朝 箱崎御陣所ニテ

一 関白様ニ 御会事

宗湛 宗室<sup>(60)</sup>兩人

御数寄屋三疊敷、エンナシ、二枚障子ニ上ニアケマド、六尺ノオシ板有、此路地ノ入ハ、外ニク、リヲハイ入テ、トヒ石アリ、一略一、ハネ戸マテ参候へバ、内ヨリ

関白様シヨウジ御アケナサレテ、ハイレヤト御コエタカニ御定候也、イマダ暗シテ、座敷ノ内モ不見分、一略一、サ候テ、内ヨリ被成 御出テ、茶ヲノモウカト御定候テ、シキ肩衝ヲ四方盆ニスへ、井戸茶碗ニ御道具入テ、水覆、引切ニテ御手前

也、御茶タテラレテ後ニ、此肩ツキヲ御手ニモタセラレテ、兩人ノモノヲ御ソバニ被召寄、是ヲ見ヨ、此薬有ユエニ、シギト云ソト御定候也、<sup>(61)</sup>

公式の場では平伏して面をあげることもできないが、茶室でむかい合うときは、秀吉が宗湛たちに茶を立てる。公式の広間では、家臣たちは一段低いところにはなれておるが、狭い茶室では、同じ畳のうえに手が届く近さに座っている。静寂のなかで、くつろいだ気持ちになり、広間では話せないようなことも口にすることができる。<sup>(62)</sup> 一服の茶とは言いながら、それがもたらすものは非常に大きいといえよう。

## (2) 戦国武将と茶

それでは茶の湯が何故戦国武将たちによって好まれたのだろうか。前節の茶の湯がもつ静寂重厚な雰囲気もそうであるうが、もっと別な根本理由があつて良いはずである。山上宗二は茶の湯に招かれたときの「客人振りの事」条で「一座ノ建立」を上げている。そして、

常ノ茶の湯ナリトモ、路地ニ入ヨリ出ルマデ、一期ニ一度ノ会ノヤウニ、亭主ヲ可敬畏、世間雑談無用也、<sup>(63)</sup>

と書き残している。山上宗二の「一座ノ建立」とは、「茶の湯を成功させる為に、互いに亭主・客同士で敬いあい、そ

の一会を誠心誠意一座建立しなさい」という意味に使っているが、小稿は逆に、「一座を建立する為に茶の湯を催す」とこの一座建立を理解したい。今まで茶の湯の結縁性を論じてきたが、茶に結縁性があるからこそ、一座の建立ができるのである。

先に、林屋辰三郎氏は「一味同心」という宗教語を取りあげられた。そして中世民衆に広まった茶寄合について、

「一味同心」という言葉は、いうまでもなく、鎮守の社頭において神水をくみかわす、古い起請の方式に由来する団結を現わすものである。<sup>(64)</sup> ここに於いて、この時期に民衆の間に広まった「茶寄合」について、私はこの「一味同心」の理想を考えざるを得ないのである。一碗の茶の味わいに結ばれる会衆の心は、まさしく一味同心に他ならなかつたと思う。<sup>(65)</sup>

と述べられた。これこそ茶がもつ結縁性の結果と思われ。茶に結縁性があるからこそ、「一味同心」が生きてくるのである。しかし氏のいう一味同心には、中心に宗教が存在する。ところが戦国期に入って神仏が否定されると、宗教のかわりに茶の結縁性がそれに取って変わるようになったのではないか。そして戦国の武将たちが茶の湯にもとめたものがこれに他ならない。下剋上の時代、互いの関係

を確認する最高の手段として茶の湯がその具として求められたのではないだろうか。

もう一つ忘れてならないのは、戦国期をリードする武将、例えば織田信長が茶の湯を個人的にも政治的にも催すからである。<sup>(66)</sup>周知のとおり茶の湯は現在でもそうであるが、専門的な知識と訓練を必要とする。茶室で時の政権を担う人物を前にするとき、武将たちは恥をかきたくないと思うのが当然である。したがって、茶の湯が出来るか出来ないかは、武将個人のみならず、家の問題にもなっていくのである。織田信長に茶の湯に招かれた場合、茶を知らないでは通じない時代であったのである。

政権担当者と膝を交えて茶を喫し縁を結ぶことができ。これは戦国の世を生きる為には非常に重要なことである。こうして見るならば、戦国の武将たちが茶の湯に一生懸命になったのもうなずけるのである。

### (3) 戦国型茶の湯の終焉

#### ① 第一の徴候

藩政初期、茶の湯が大名と幕臣との間にあって、大きな役割をはたしたのは前節で述べたとおりである。しかし、こうした暗黙の内に互いを確認する方法は、政治が不安定な間は役にたつが、政治形態がはっきりしてくると役にた

たなくなってくる。それが徳川家光政権の誕生であった。寛永十二年十月、家光の幕閣首脳部の新しい陣容がそろい、前年三月には老中・若年寄の職務規定もきめられた。老中の職掌の中に、

#### 一 国持衆総大名一万石以上御用並び御訴訟之事<sup>(67)</sup>

とあって、大名からの軽微な進物の取次ぎをも含めた政務に關して合議を命じ、しかるべき地位にない幕臣は大名に幕府の触れ等を伝達することを禁じたのである。<sup>(68)</sup>そして、「老中衆に物を申す時は、人を仲介して申さず直接に申せ、少しの事は使者にて申せ」という指示もなされた。秀忠時代は、幕臣の活動が活発で、彼等を通さないと訴訟や嘆願が簡単には取り上げてもらえなかったが、これによって大名と老中の直接交渉ができるようになった。こうした幕臣と大名の交渉を止めようとする政策はあったが、家光政権期を通じて大名と幕臣との交際はつづけられたようである。しかし、幕臣も今までのような便宜は図れなくなつたと思われ<sup>(69)</sup>る。

#### ② 第二の徴候

前節でのべたが、政権担当をする徳川秀忠と家光そして四代将軍家綱の茶の湯に対する態度の変化が大きな徴候としてあげられる。『徳川実紀』の編集者の記載方法の変遷

もあると思われるが、『徳川実紀』に見られる茶の湯の記事を概観すると、次のようになる。

秀忠期―毎年春秋二回大名を召して茶を賜うことが多い。

例、寛永五年三月二十二日・同年八月十四日・十六日<sup>(70)</sup>

家光期―寛永十六年までは大名に茶を賜うことがあった<sup>(71)</sup>が、それ以後は少なくなる。しかし家光は茶の湯は好きで度々江戸城西丸・二の丸の茶室で茶事を催している<sup>(72)</sup>。

家綱期―茶の湯の記事は非常に少ない。

これから見ると、寛永中期頃までは、江戸幕府は茶の湯を大名をもてなすために公に使うことが多かったが、それ以後は私的文化として楽しむのために催すようになった。そうすると、先述したように政権担当者の茶の湯にたいする態度が変化すれば、大名や幕臣たちの茶の湯もしだいに変化していくのも当然と思われる。

### ③第三の徴候

これまで活躍してきた千利休の弟子たち、古田織部・小堀遠州・片桐石州ら茶道師範と呼ばれる人物たちの役割が終わった<sup>(73)</sup>。これら三人はいわゆる幕府の茶道役として茶の

茶が持つ「結縁性」と戦国武将たち(石田)

湯をリードしてきた。勿論、江戸幕府には中野笑雲という茶道頭<sup>(74)</sup>はいるが、彼は実務者であって茶道師範ではない。

古田織部らは、幕府流の茶道を作り、それを大名や幕臣に教える立場で活躍したのである。これが片桐石州を最後にいなくなってしまった。この事実は何を意味するのだろうか。大名茶のスタイルを完成させたので、彼らの使命は終わった、という論もあるが、それだけであるとは考えられない。本稿は政治的(家の問題に関わるほどの真剣な)茶の湯の需要が大名たちの間で少なくなった為だと考えた<sup>(75)</sup>。

以上、三つの徴候を総合して考え合わせると、戦国期から続いて来た政治的結縁性重視の茶の湯(＝戦国型茶の湯)は、寛永期を機に文化的な要素を中心とした、趣味性の強い茶の湯へとしだいに変貌していく姿が、浮き彫りにされて来るのである。

### おわりに

現在も茶の湯は多くの人々によって継承されている。しかし、歴史上に行なわれた茶の湯は、男性を中心にする活気がみられるのである。同じ茶の湯なのに何故かくも隔たりがあるのか不思議でならなかった。こんな時に、原

宿「竹の子族」の件があったのである。「良縁」これこそ戦国の武将たちが、日々求め続けたのではないか。これが本稿の発端であった。

「結縁性」こそが、戦国期を通じて武将たちが茶の湯を好んだ最も大きな理由であろう。戦国期は室町時代の権威や、心のより所であった宗教が否定され、戦いに於いては親兄弟といえども裏切らざるを得ない時代であった。そうした中において、「茶を出す方と飲む方」に結縁性が生まれる現象を見つけた武将たちは、互いの関係確認の為に茶の湯を利用するようになった。従って、数人で茶の湯を行なう場所の必要性が生まれ、距離的にも個人と個人が最も親密になれる、小座敷が自然に生まれたのであろう。しかも戦国の世は逃れても逃れても常に「死」が背景にある。そのため、そこから生まれる茶の湯の美は美術的価値観よりも、精神的なものにより比重が置かれる「わび」の美へと傾倒していった。こうした性格をもつ茶の湯を、表面的な政治よりも、裏面的に政策上活用したのが織豊政権であった。ステータスシンボル化はこの時点で生まれた現象であるが、この影響は江戸時代まで及び、藩政初期しきりに茶の湯が催されたことは、既に述べたとおりである。しかし、寛永期以降家光の幕閣が編成され、戦国の世を経験

しない老中による、純粹な官僚政治が行なわれるようになると、戦国型の結縁性重視の茶の湯は不必要になり、しだいに茶の湯は趣味化していった。そして、これ以後の茶の湯は、文化的な面で後世に長く伝えられていくのである。

## 注

- (1) 米原正義『戦国武将と茶の湯』（淡交社、昭和六十一年二月二十二日）二一六ページ。
- (2) 原宿における竹の子族の話は、本稿のきっかけになったもので「状況説明」として出すもので資料とはしない。
- (3) 〆茶〆には、単なる飲料としての茶と、意識的に茶を人に飲ませることを目的とした茶との二通りある。本稿が茶と表現する場合は、断わらない限り後者を指す。
- (4) 『草加市史（民俗編）』（昭和六十二年三月九日）六二四ページ。
- (5) 上原兼善『鎖国と貿易——薩摩藩の琉球貿易——』（八重岳書房、昭和五十六年十一月二十五日）一一一ページ。
- (6) 『上井覚兼日記』（大日本古記録）天正三年三月二十七日。
- (7) 注(6)天正三年四月十日。
- (8) 〆礼茶〆『上井覚兼日記』注(6)には、礼茶の記事が他に一件ある。天正二年十月二十日の条。
- (9) 『上井覚兼日記』注(6)天正二年十二月五日、肥後志岐領主鎮経が、天草領主天草鎮尚と島津義虎との義絶を機

に、島津義久に通ずる為に、正興寺・湯の浦入道二名の使者をたてた時にも、義久は面会の後使僧ばかりに茶が供せられた。

- (10) 拙稿「戦国末期薩摩の茶の湯」(『藝能史研究』九六)二二ページ。

- (11) 喜舎場一隆「あや船考——島津氏琉球支配への経緯——」(『日本歴史』二四一)六五ページ。

- (12) 『参天台五台山記』(改定史籍集覧、第二六冊)。

- (13) 拙稿「関東往還記」に云う「諸茶」について(『茶湯』十七、本芽文庫)二七ページ。

- (14) 「セールスマンの言葉」(『生命保険の場合、団体と個人がありますので、いちがいに言えませんが、お茶が出されることは心の通じあいを示すことですので、契約への第一歩になります』三井生命保険相互会社、人事部能力開発室副長関志津子氏。

- (15) 多田侑史『数寄』(角川選書、昭和六十年七月三十日)二四二ページ。

- (16) 『参天台五台山記』注(12)、延久四年三月二十一日。

- (17) 『参天台五台山記』注(12)、延久四年五月十九日。臨川書店「改定史籍集覧本」昭和五十九年四月二十五日復刻版には、五月二十九日とあるが、前後の日付から十九日とした。

- (18) 「石橋羅漢供」

「栄西」——『元亨釈書』(国史大系)四二二ページ。

茶が持つ「結縁性」と戦国武将たち(石田)

「俊苧」——『泉涌寺不可棄法師伝』(『統群書類聚』巻二二七)四五ページ。

「圓明」——『鷲峰開山法燈圓明国師行實年譜』(『統群書類聚』巻二二七)三五二ページ。

「孤峰」——『孤峰和尚行實』(『統群書類聚』巻二三五)五六九ページ。

「無文」——『深奥山方広開基無文選禪師行業』(『統群書類聚』巻二三八)六五〇ページ。

- (19) 拙稿「鎌倉時代「茶」の普及についての一考察」(『法政史学』三四号)三一ページ。

- (20) 「結縁」(『大漢和辞典』(大修館書店)八巻一〇三三ページ)。

- (21) 注(10)、一九ページ。

- (22) 『上井寛兼日記』(大日本古記録)天正十一年三月五日。

- (23) 『梅津政景日記』(大日本古記録)元和五年六月四日「尾張様ニ而御振舞、御数寄屋ニて御茶迄御立被成候由、屋形様御物語有」

- (24) 「振舞」(『日葡辞書』(岩波書店) FURUMAI フルマイ (振舞) 招宴、FURUMAI O SURU (振舞をする) 宴会を催す)。

- (25) 『秋田県史』第二冊(歴史図書社、昭和五十五年九月二十五日)「天英(義宣)公紀」

- (26) 「数寄」(『梅津政景日記』(注23)寛永五年九月十七日に、「一、明日御茶兩 屋形様へ可被進由」とあって、同

日条に「一、兩 屋形様明朝御数寄之為御礼與、御登城」と記されていることから、数寄は、茶の湯であることが分かる。

(27) 注(23)史料、第四卷三七ページより五八ページ。

(28) 『寛政重脩諸家譜』によった。最下段の数字は(号数—ページ数)を示す。

(29) 『秋田県史』第一冊(注(25))、九二ページより一〇四ページ。

(30) 藤野保『新訂幕藩体制史の研究』(吉川弘文館、昭和五十八年六月二十日)二五八—二六〇ページ。

(31) 注(30)、二八三ページ。

(32) 注(30)、二五一ページ。

(33) 注(30)、二四七ページ。

(34) 山本博文『寛永時代』(『日本歴史叢書』吉川弘文館、平成元年七月二十日)一〇—一ページ。

(35) 『梅津政景日記』(注(23))元和五年四月九日。

(36) 『梅津政景日記』(注(23))元和五年八月十七日。

(37) 『武家諸法度』(『徳川禁令考』前集第一、創文社)六一ページ。

(38) 『梅津政景日記』(注(23))元和三年上洛の折、日記の筆者梅津政景は随行せず、詳しいことは不明である。

(39) 『梅津政景日記』(注(23))元和七年九月十八日「一、御数寄屋出来、今朝くち切有、御客ニハ土井大炊殿(利勝)

・松平右衛門殿(正綱)・嶋田次兵へ殿・道三法印(今大

路親清)より元和八年三月十四日「朝、延寿院(曲直瀬正紹)へ数寄にて御出被成候」まで頻繁に数寄にて交流している。

(40) 『木下延俊慶長十八年日次記』(『栃木史学』第三号、国学院大学栃木短期大学史学会)。

(41) 『右同書』二〇七ページ。

(42) △大久保忠隣▽徳川家康の譜代家臣、後、秀忠老職(『寛政重脩諸家譜』以下略一一—三七八)

(43) △都筑為政▽秀忠勤仕、槍奉行、五千石(一三一—一七二)

(44) △石川康長▽秀忠勤仕(三一—一八)

(45) △村瀬重治▽秀忠使番、三千石(一六一—一〇四)

(46) △古田織部▽重然、最初秀吉御伽衆、後家康に属す、一万石(『図録茶道史』淡交社、昭和五五年三月二十六日、三一〇—一〇七ページ)

(47) △岡田利治▽秀忠勤仕(四—二一五)

(48) △將軍様▽徳川秀忠

(49) △酒井忠世▽秀忠老中(二—三三)

(50) △山岡景長▽家康使番、千五百石(一七—一三五二)

(51) △青山成重▽秀忠側近、一万石(二—一〇八)

(52) △花房左衛門尉▽職之、家康につく、八千二百二十石

(二—一九七)

(53) △安藤重信▽秀忠奉行職、一万石(二七—一七五)

(54) △土方雄重▽秀忠小姓、一万石(五—一三五六)

(55) △脇坂安元▽秀忠につかう(二—一五—一七)

- (56) △教寄▽『木下延俊慶長十八年日次記』(注40)では、教寄と茶の湯と使いわけがされているが、『日葡辞書』に「SUOI スキ(教寄・好き) 心を傾け好むこと、また、茶の湯(CHANOYU)の道、またその修行」と定義づけられているので、本稿では同一に解釈する。
- (57) △他研究書▽注(1)、又は、注(46)同書に詳しい。
- (58) 『宗湛日記』(『茶道古典全集』六卷、淡交社、昭和三十三年十二月二十日)一五八ページ。「天正十五年正月三日」。
- (59) 陳舜臣「島井宗室」(『商魂』集英社、昭和五十九年五月九日)九五ページ。
- (60) △宗室▽博多豪商「島井宗室」のこと。詳しくは注(59)。
- (61) 注(58)、二二九ページ。
- (62) 注(59)、九〇ページ。
- (63) △一座建立▽『山上宗二記』(『茶道古典全集』六卷、注(58)九三ページ)。
- (64) 林屋辰三郎『中世文化の基調』(東京大学出版会、一九五三年七月十日)一四〇ページ。
- (65) 注(64)、一四二ページ。
- (66) 『信長公記』卷二一(新人物往来社、一九八九年七月一日)二二七ページ。
- 天正六年戊寅 御茶の湯の事「正月朔日、五畿内、泉州、越州、尾・濃・江・勢州隣国の面々等、在安土にて各御出仕、御礼これあり、先づ、朝の御茶、十二人に下さる、御座敷。右勝手六畳布(じき)、四尺縁、一略一、」
- (67) 北島正元『江戸幕府の権力構造』(岩波書店、昭和三十一年九月二十七日)四六二ページ。
- (68) 注(34)、二〇ページ。
- (69) 注(34)、二五ページ。
- (70) 『大猷院殿御実紀』卷一一(『徳川実紀』第二篇 新訂増補『国史大系』四三〇・四四一ページ)。
- (71) 『大猷院殿御実紀』卷四二(『徳川実紀』第三篇)一五九ページ。
- (72) 『大猷院殿御実紀』卷四九(注(71)二五九ページ。寛永十九年三月十八日「内藤志摩守忠重二丸にて御茶を献ず」など)。
- (73) 谷端昭夫『近世茶道史』(淡交社、一九八八年十二月四日)二二二ページ。
- (74) △中野笑雲▽『台徳院殿御実紀』卷四十二(注(70)、九一〇ページ。元和二年五月是月「茶道頭中野笑雲駿府より来り拜謁し。江戸にて宅地を下さる。」
- (75) 注(73)同ページ。
- 付記  
本稿作成に当たって、明治大学「月曜ゼミナール」各位・多田侑史先生に大きな御教示を頂戴した。また、桑山浩然先生・村上直先生には懇切なる御助言をたまわった。記して御礼申しあげる。